

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00603

研究課題名(和文) 認知言語学における「捉え方」概念に関する類型論的検討

研究課題名(英文) Typological investigations of the concept of "construal" in cognitive linguistics

研究代表者

守田 貴弘 (Morita, Takahiro)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：00588238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ビデオ映像を用いた発話実験によって発話データおよびジェスチャーデータを収集し、言語表現およびジェスチャー表現の主体性/客体性を分析することにより、認知言語学における「言語表現が異なれば捉え方も異なる」というテーゼに反して、「言語表現が異なっても捉え方が同じこともありうる」ことを示した。これにより、極端な相対主義を引き起こすことなく、認知言語学における深い意味分析のレベルを類型論に適用する見通しを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知言語学は、言語表現をもとに、その話者がどのように世界を理解しているのかを説明しようとする試みである一方で、類型論を視野に入れるとき、言語構造からその話者の認識まで規定することにつながる危険性も孕んでいる。本研究の結果は相対主義を避けながら類型論を志向するものである一方で、より一般的には、言語形式と意味の対応関係をどのように考えるのが適切なのかという問いにも及ぶものであり、さらなる実証的研究だけではなく、言語哲学にも開かれた成果となっている。

研究成果の概要(英文)：Collecting speech and gesture data through video elicited production experiments and analyzing them in terms of subjectivity/objectivity of linguistic and gestural expressions, this study has shown that, contrary to the thesis of cognitive linguistics that "different linguistic expressions reflect different construal", "different linguistic expressions may be produced from the same construal". This result can be considered to show a prospect applying deep semantic analysis of cognitive linguistics to typological studies, without involving extreme linguistic relativism.

研究分野：言語学

キーワード：認知言語学 捉え方 類型論 ダイクシス 主体性 客体性 ジェスチャー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

認知文法では、意味は概念内容をいかに把握するかというプロセスとして捉えられる。この考え方は真理条件的な違いを生み出さない意味を扱えるという点で魅力的である一方で、移動表現をめぐる類型論的議論において、申請者の過去の研究により、フランス語には以下の特徴があることが分かっていた。

- (1) a. Il vient en courant. 'He comes running.'
- b. Il court vers moi. 'He runs toward me.'

(1a) と(1b) の真理条件は等しく、同じ状況を描写する文として同等に適格である。動詞枠付け言語としての特徴がはたらくならば (1a) の頻度が高くなりそうだが、実際には (1b) の方が圧倒的に頻度が高いことが分かっていた。この分布を説明するために、認知文法における主体的事象把握や客観的事象把握という考えを持ち出すことも可能だが(フランス語は客体的事象把握が好まれる言語であるため、話し手が客体化=言語化される (1b) の方が好まれるのである、など)、同一の実験内でフランス語話者の中に (1a) と (1b) のどちらを使う人もいるという事実がある以上、直ちに世界の把握のし方に説明を求めるには躊躇してしまう。

さらに、フランス語の内部だけではなく、日本語との間にも、以下のような規則的な違いがあることも分かっていた。

- (2) 通りの向こうから話し手に向かって男の人が移動する状況
 - a. 男の人が歩いてくる。
 - b. Un homme marche vers moi. 'A man walks toward me.'
- (3) 目の前に犬のケージがあり、中にいる犬が、横についた出入口から出る状況。
 - a. 犬がケージから {出た / 出てきた / 出ていった}。
 - b. Un chien est sorti de la cage. 'A dog exited the cage.'

日本語は方向を表すのに話し手が明示されない (2a) のような直示動詞を使うのに対し、フランス語では話し手が明示される (2b) が使われる。また、話し手の位置に対して中立的な横向きの移動であっても、日本語では任意の直示動詞が使用可能であり、どれを使っても真理値が変化しないのに対し、フランス語の (3b) ではそもそも直示動詞は使われない。

ここでも主体的あるいは客観的事象把握を持ち出し、日本語は主体的事象把握の言語、フランス語は客観的事象把握の言語という特徴づけをすることも可能かもしれないが、言語決定論的な結論となってしまうという危険も残されていた。

2. 研究の目的

本研究は直示動詞を使った話し手領域の表示に関して、日本語話者とフランス語話者の間で認識論的な相違があるかどうかを明らかにすることを目的としていた。そのため、(i) フランス語の直示動詞が日本語の直示動詞と同等の話し手領域を表示する能力を持っているかどうかを実験的手法およびインフォーマントチェックによって検証することで、特定の形式で表現される捉え方の内容を明らかにした。さらに、(ii) 認知文法における「捉え方」概念を精査し、(i) の結果を分析する際に、言語間で表現形式や表現頻度が異なっても、外界把握としての捉え方という意味では違いが存在しない可能性を探求した。(2) や (3) のように、表現形式としては日仏の間には確かに違いがあると考えられるが、表現形式の違いを認識の違いに直結させない「捉え方」(construal) 概念の理解のあり方を検討することで、極端な相対主義を拒否しながら認知言語学を類型論に適用する方法を考察した。

3. 研究の方法

目的 (i) については、フランス語話者および日本語話者に対する映像発話実験をおこなった。実験は2人1組で行い、1人が映像を見て、もう1人に内容を説明するという実施形式であり、言語表現だけではなく、ジェスチャーも考察対象に含めた。映像内容は、過去に行った実験材料を再編成して利用している。

目的 (ii) については文献調査と並行し、実験データを分析する中で、以下のうち (4b) の可能性を追究する方法をとった。

- (4) a. 捉え方が異なるので言語表現が異なる。
- b. 捉え方は同じだが言語表現が異なる。
- c. 捉え方は異なるが言語表現は同じ。
- d. 捉え方が同じで言語表現も同じ。

(4a) が一般的な認知言語学的見地と言えるものであり, (4d) はそもそも問題にならないと考えられる。問題となるのは (4b) と (4c) であり, 支持しようとしている仮説は (4b) である。捉え方そのものの直接的な観察はできないが, 言語とジェスチャーによる表現を比較することにより, 内的な外界把握を推測するという方法をとった ((4c) は「同じ言語形式が使われているときに異なる意味を表す (= 思想が異なる) 可能性の探求」に近いものであり, フレーグなどの見解を踏まえる必要があると考えられる。そのため, 本研究の射程からは外れる)。

4. 研究成果

大きく 2 つの成果があった。1 つは, (4b) の可能性をほぼ示すことができたと考えられる点である。この主張は, (a) 日本語とフランス語は言語表現上の違いがあっても, ジェスチャーでは極めて高い類似性が示したことに加え, (b) ジェスチャー上でも話し手の主体化と客体化という現象が観察され, なおかつ (c) 主体的な言語表現と客体的なジェスチャー表現の組み合わせやその逆の組み合わせのような, 表現の主体性が一致しないデータが観察されたことに支えられている。

今回の実験においても, 日本語では直示動詞の使用が多いのに対し, フランス語では *vers moi* 'toward me' のように, 話し手が言語化される傾向はあった。しかし, ジェスチャーを観察すると, 両言語話者の間にはほとんど違いはない。たとえ言語的にダイクシスが表現されていないときであっても, フランス語話者もダイクシスをジェスチャーでは表現することから, 認識上の違いがあるとは考えにくいと言える。また, *venir* のような直示動詞が主体的表現であり, *vers moi* のような, 話し手が言語化された表現は客体的表現だという特徴づけは可能だが, その主体性/客体性はジェスチャーでも観察される。話し手は自分の体を基準にアイコニックに方向を手で示すことが圧倒的に多いのに対し, ジェスチャースペースに事態観察者として話し手を客体的に設定し, そこからの見えを説明するといった手段が用いられることもある。そして主体的な言語表現と客体的なジェスチャー表現が重なりといったずれがあるとき, 表現レベルの主体性/客体性と捉え方を直結させることはできないと考えられる。外界の理解のし方が実際にどうなっているのかは観察不可能であるため, 消極的な主張の方法になってしまうものの, 目的 (ii) についてはひとまずの結論を出すことができた。

もう 1 つは, 直示動詞が表す話し手領域のあり方に大きな違いがある可能性が見つかったことである。(3) のような状況において, フランス語で直示動詞を使うことはやはり不自然であることはインフォーマントにも確認することができた。その一方で, 過去に行った実験データを改めて検討したところ (新規の実験が難しい社会的状況になったため), 「誰かがもう 1 人の人を呼び, 呼ばれた人が呼んだ人のところに移動する」という状況を横から観察するとき, フランス語話者でも直示動詞の使用が非常に多くなることが明らかとなった。これは, 話し手領域のあり方や, それを表現する適切な状況について言語による違いがあることを示唆する。(3a) の日本語であれば, 犬と話し手が同じ空間を共有すると捉えれば「来る」が使われ, 話し手と関係ないと見なせば「行く」が使われると説明することができる。これに対応するフランス語の直示動詞の使用が不可能であるということは, このような直示動詞の機能的意味がフランス語に欠けているように思える。しかし, 日本語の「来る」などとは異なる動機づけにより, *venir* の使用が可能になることをデータは示唆している。*venir* にも機能的な意味があるということであり, しかも, 日本語では, 呼んだ人と話し手の関係性が親密でないときには「呼んだ人のところに女の人きた」とは言いにくいところ, フランス語では *elle vient vers la femme qui l'a appelée* 'she comes toward the woman who called her.' のような言い方も可能である。日本語においては話し手自身が移動者と場所を共有するといった状況が機能的意味の発動条件であるのに対し, フランス語では, 移動者が誰かとコンタクトを取る状況を *venir* で表し, 話し手自身は自己の視点を保っているような違いがあることを示唆している。*venir* の用法全体を解明するには至らなかったが, 直示動詞の機能的意味の内実さらに探求すべき問題が含まれていることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 守田貴弘
2. 発表標題 言語研究が進化研究に貢献できることはあるのか
3. 学会等名 基礎言語学研究会シンポジウム「言語（コミュニケーションへ）の進化」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Morita Takahiro
2. 発表標題 Linguistic deictic meanings beyond gestures: A contrastive study on motion event descriptions in French and Japanese
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守田貴弘
2. 発表標題 言語はジェスチャーから進化したのか．日本語話者とフランス語話者の言語行動と非言語行動
3. 学会等名 日本フランス語学会談話会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Morita Takahiro
2. 発表標題 La deixis exprimée par la langue et par la gestuelle : une différence entre le japonais et le français
3. 学会等名 Langue et subjectivité (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 守田貴弘
2. 発表標題 認知言語学と言語類型論
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 4
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Morita Takahiro
2. 発表標題 Elle vient vers elle: Functional meanings of the French deictic verb venir
3. 学会等名 Neglected aspects of Motion-event Descriptions (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Fagard, Benjamin, and Laure Sarda	4. 発行年 2022年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 271
3. 書名 Neglected Aspects of Motion-Event Description	

1. 著者名 窪園晴夫、野田 尚史、ブラシャント パルデシ、松本 曜	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 328
3. 書名 日本語研究と言語理論から見た言語類型論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Neglected Aspects of Motion-event Descriptions 2022	開催年 2022年～2022年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------